現代の貨幣・金融

高木 暢哉 編著

ミネルヴァ書房

〈執筆者紹介〉（執筆順）

高木暢哉（福岡女子大学学長　九州大学名誉教授）
鈴木芳徳（神奈川大学経済学部教授）
竹村脩一（大分大学経済学部教授）
阿部真也（福岡大学商学部教授）
荒牧正憲（九州大学経済学部教授）
平勝広（同志社大学商学部助教授）
波多野真（武蔵大学経済学部教授）
都野尚典（長崎大学経済学部助教授）
野田弘英（埼玉大学経済学部助教授）
吉沢法生（神奈川大学経済学部助教授）
永田裕司（九州大学経済学部助手）
楯岡重行（福岡大学商学部教授）
寺園徳一郎（福岡大学経済学部教授）

現代の貨幣・金融

1980年6月1日　初版第1刷発行　　検印省略

定価はケースに
表示しています

編著者　高木暢哉
発行者　杉田信夫
印刷者　坂本起一

発行所　株式会社　ミネルヴァ書房
607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1
電　話　(075) 581-5191(代表)
振替口座・京都 8076番

©高木暢哉，1980

内外印刷・酒本製本

3033-41076-8028
Printed in Japan

はしがき

「現代の貨幣・金融」を論題とする研究をまとめて書物にすることは、わたくしたちにとっては長年の課題であり、懸案であった。もうかなり前のことになってしまったが、わたくしは竹村脩一氏と共著で、『貨幣・金融の基礎理論』をミネルヴァ書房から公刊した。わたくしはそのはしがきや序論において、こう断っていたのであった。現代の貨幣・金融の諸事実の解明こそが研究の究極の目標・課題であり、この書物はそういう終局の課題をはたすに必要とされる基礎的理論を用意しようとするものである、と。わたくしは、これを出発点とし足掛りとして現代の貨幣・金融の解明へと踏みこんでゆきたいものと願って、書名は『現代の貨幣・金融』とし、そこで問題とされねばならぬと思われる諸事項を、思いつくまま記したことであった。しかしこうしてみずからに課したはずの仕事がいつしか延び延びになり、今日に至ったわけであって、たれの責でもない、全くわたくし自身に帰することと、いわなければならない。

この『現代の貨幣・金融』の執筆については、その当初からわたくしは、こんどは長年研究をともにしてきた多くの方々による助力を仰ぐことに決めていた。論稿を早くから届けて下さったりした方々に対し、このように発刊が遅れてしまったことは、全く申しわけないことで、お詫びのしようもない。しかしわずかながら弁解がましいことが許されるとすれば、この遅れたことで編集上救われた点もなくはなかった。その間に時勢と情況に重大な変化が生じたからである。

ドル・ショックや石油危機などと大事件が続発し、既成の概念や尺度では測りかねる動乱・変動の時期に世界も

経済も突入したかにみえる。内外ともに経済は揺れ動き、将来のことはもちろん、現在のことすら定かに分らぬ。不確実性の時代などという言葉が用いられ、流行するようになった。歴史自身が、どうやら時の流れに区切りをつけ、時代を刻み、つぎのそれへと歩みを早めているかのようだ。変移の時期、過渡の時期は、もとより不確実性の時代であって、これこれ、しかじかであるとは、いいにくい。

しかしそうであるにしても、こういう激動・激変の歴史的過程の中にあって、やはりしだいにはっきりしつつあることも、なくはなかろう。いくつかの筋道がなんとなく見えてくる、むしろかえってよく見えてくる、ということもあってよい。『現代の貨幣・金融』を研究するうえにおいての手掛りとか拠りどころとか筋道になりうるものが、この歴史的過程の中にあって、着々と、少しずつではあるが、社会的に歴史的に醸成されつつあるのかも知れない。整理されねばならない制度やその思想などについてはそれぞれ整理をつけ、その他方、未来への予量や手掛りなどを求めつつ、問題を掘り起こし、設定し、探求してみる。そういうようにするしか、ないのではあるまいか。既存の体系が壊われてゆき、それに代わるものがまだ生まれていない。

本書の草稿をそろえるにあたり、何回かの研究会をもつことにした。各人それぞれ報告をし、討論を重ねた。わたくしも最初の集まりで報告をし、わたくし自身にとっての問題や思念を投げ出してみた。本書の第一編は、それを元にして書かれたものである。現代貨幣・金融のさまざまの問題点を経済運行の総体とのかかわりにおいて、しかもその基本的関係において取り上げ、考え直おし、評価してみようとしたものであって、その観点や問題の性格からして、歴史や制度や政策や学説などへと、ついつい論考は拡がるばかりとなった。しかしこれを別の見方からすれば、後続のそれぞれの論稿にとり総体としての問題提起になり、序編のようになったかも知れない。または総論のようなものになっているかも知れない。しかしそれは、意図してのことではなく、ただそうなったというにすぎない。それぞれの執筆者はそれぞれにとっての諸問題を追い、各人各様の目標と立場から究明されているのであ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

って、意見や表現に食い違いや異同があるとしても不思議ではあるまい。なまなか統一できるようなものではない。研究対象それ自身がそれを許すようなものでもないからである。

もっとも、こういうことはありうると思う。研究会を重ねるうちに、お互いが書こうとしていることが自然と分かりあえて、それらを収載する本書の内容に思わぬ調整が生じうるということである。自然のまとまりが生まれ、それなりに本書が諸論文の単なる寄せ集めに陥ることを防ぎ、多少とも一貫し統一性のある内容のものにしてくれはしなかったかと、いまは願うのみである。

いつもミネルヴァ書房には迷惑のかけとおしであった。前書が出てから十年を越える。本書がこうして遅れて出るについては、杉田信夫社長にはくれぐれもお詫びを申し、またお礼を申上げたい。同社の高橋邦太郎氏には、いつもながら、ゆきとどいた配慮やお世話にあずかった。その他、多くの方々からの御助力に対しても、この場所を借りて、厚く御礼申上げるしだいである。

一九八〇年三月二九日

高木暢哉

目　次

はしがき

第一編　現代貨幣・金融の特質と問題——不換の経済

はじめに——「現代の」という視座

第一章　現代不換の経済の形成

第一節　不換の経済時代への序奏……四

第二節　IMF通貨体制の内実と崩壊……八

第三節　不換の通貨体制……一三

第二章　現代不換通貨の性格と流通

第一節　現代不換通貨の性格……二一

第二節　現代不換通貨の流通・循環……二九

第三章　現代不換の経済の特質と問題

第一節　現代不換通貨の役割……三七

第二節　兌換の経済においての場合……四〇

第三節　現代不換の経済の特質と問題……四五

第二編　国内と国際

第一章　不換通貨と現代資本主義

第一節　問題の概要……五〇
第二節　市場の内部機構化……五一
第三節　所有制度の内部機構化……五四
第四節　不換通貨体制の意義……五八

第二章　価格の度量標準と流通必要金量の概念

第一節　インフレーション論の通説……六五
第二節　価格の度量標準について……六九
第三節　流通必要金量の概念……七六

第三章　現代の流通と価格の決定

第一節　はじめに……八六
第二節　宇野・久留間論争……八八
第三節　価格決定と主体の問題……九二
第四節　現代の価格と価値……九八

第四章　「不換銀行券論争」の現代的意義
第一節　提起された諸問題……一〇六
第二節　新しい問題の提起……一一〇
第三節　兌換と不換の意味……一一四
第四節　むすびと展望……一一八
第五章　不換の国際通貨ドルの流通根拠
第一節　不換制下の国際通貨……一二四
第二節　ブレトンウッズ体制下のドル……一三〇
第三節　金交換停止以降のドル……一三三
第六章　インフレと国際通貨の循環体系
第一節　世界貨幣＝金の循環体系……一四〇
第二節　基軸通貨＝ドルの循環体系……一四五
第三節　地域通貨と基軸通貨の循環体系……一五三
第七章　資本輸出と変動相場制
第一節　現代世界経済と資本輸出……一五九
第二節　資本輸出の論理と史的展開……一六二
第三節　現代資本輸出の形態と特質……一七〇

第四節　資本輸出と変動相場制……一七六

第三編　過渡期と現代

第一章　『金融資本論』における通貨と信用

第一節　「社会的流通価値」説……一八二
第二節　流通必要量の特殊な把握……一八七
第三節　独占成立期の通貨と信用……一九二
第四節　む　す　び……一九七

第二章　ケインズにおける管理と不換

——『貨幣改革論』を中心として——

第一節　はじめに……一九九
第二節　拘束的国際協定と国際協調主義……二〇〇
第三節　対米不均衡の仮定……二〇四
第四節　ハーヴェイ・ロードのプリサポジション……二一〇
第五節　む　す　び……二一四

第三章　過渡期の金融政策

——一九二〇年代連銀的策の意義と限界——

第一節　はじめに……二二九
第二節　連銀政策の展開……二三〇
第三節　資本蓄積と信用制度……二三四
第四節　むすび……二三八

第四章　中央銀行間協力をめぐって
——一九三一年ドイツ銀行恐慌における——

第一節　はしがき……二三一
第二節　一九三一年、ドイツの夏……二三三
第三節　第二次クレディットの座礁……二三七
第四節　むすび……二四四

第五章　IMF体制の崩壊の軌跡

第一節　IMF体制とその崩壊……二四六
第二節　崩壊の軌跡……二四六
第三節　SDRの本質と形態移行……二六〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一編　現代貨幣・金融の特質と問題——不換の経済

はじめに――「現代の」という視座

およそ考察と呼ばれるものは、すべてなんらかの程度・意味における視座に立ってのものである。この視座というのは、そういう考察の主体に対し促してやまない主体にとっての問題と本来的にかかわりをもつ。こうして視座とは、主体が問題とのかかわりにおいてとらざるをえない考察においての態度・振舞いであるということができよう。もともとわれわれは現実に生活を営む営為の主体であって、日々の経済生活を営むにあたりさまざまの問題に当面する。そこから触発されてこれに取り組み、これを解決しようと志す。したがって問題とのかかわりにおいていろいろと知識が必要とされ、われわれの知的探求はここに始まるわけである。こうして始められ追求される究明の方向や過程が、それを触発し、それを必然ならしめた経済生活においてのわれわれの問題それ自身により本来的に規定されざるをえないことは、もとより当然のことといえよう。

われわれはここでは、「現代の貨幣・金融」を解明しようと志している。といっても、そこにはもともとさまざまの問題がある。その性格や形態は、多様であり多種であって、例えば現代の通貨政策・金融政策などの問題があり、したがって諸制度の解明が必要とされ、また物価やインフレーションなどと、機能上の問題がある。こうしてさまざまに問題が生じ、それらに向かってそれぞれの視座から、またさまざまの仕方での接近・研究解明がなされることになるのであるが、わたくしはここでは、格別に、「現代の」ということに視座をすえて問いかけてみたい。というのは、この「現代の」ということは、単に今日の貨幣・金融ということにとっては、かりそめの修飾語、ま

たは付け足りの言葉といった程度には、とうてい受けとれないからである。そうではなくて、「現代の貨幣・金融」それ自身を根底より規定する本来にして基本的な特質を言い現わすものとして理解されるからである。今日の貨幣・金融問題をそのまま特色づけるものが、この「現代の」という規定であると思われる。「現代の」という規定は、今日の貨幣・金融問題を貫き、それを根底から特有に特色づけているからである。

今日の貨幣・金融は歴史的に段階的に時代を画して生じ、そうして現代において機能している。それは現代資本主義においてのことであり、現代資本主義自身が時代を画して生じ、それは特有で独自であり、そこでの貨幣・金融の諸過程はまさしく現代資本主義の貨幣・金融の諸過程であって、そのために働き、それにとっての機能上の枢要な一要因、そういうものとして現代資本主義再生産過程にとり、とりわけ重要な役割を果している。このことを明らかにするのが、まさにここでの課題であるといいたいほどであって、後に詳しく述べるところであるが、現代不換通貨とそれによる金融過程に支えられて現代資本主義は過程することができ、現代資本主義に特有な再生産過程が営まれ、またそれに特有な性格が具現する。こうして現代の貨幣・金融を考察するということは、特有に現代的な資本主義再生産過程の特質を解明し究明することに通じる。その意味においても、「現代の」貨幣・金融の意義や機能や諸過程の解明が必要とされるのである。

このことを、この序編で考えてみたい。このことをここで問題とし、究明してみたい。それは、現代の貨幣・金融を考察するにあたっての基本的で特殊的・特徴的な視座であるが、と同時に、その総体を展望し大観し、しかも歴史的時代の諸問題を掘り起こす接近の仕方にも通じる。『現代の貨幣・金融』と題する本書を始めるにあたり、これをもって課題とし、第一編にあてることにしたのである。

第一章　現代不換の経済の形成

第一節　不換の経済時代への序奏

1　インフレーションの恒常化

現代資本主義再生産過程とのかかわりにおいて特有に見出される現代の貨幣・金融の基本的特質はなんであろうか。たれしも気づき認める事象として、インフレーションの恒常化がある。それはいつしか現代の資本主義再生産過程に巣食い住みつき、あたかもそれとは不離の体制上の一要因であるかにみえる。そしてこのことを、制度の上で可能にしているのが、通貨の不換化という事実であった。通貨がいまは不換であり、そういう在り方で常時存在し機能し、いわば現代資本主義の内奥深く住みつき、取り去りがたい要因となり、いってみればそれがすでに体制化してきていることを根拠にして、現代の資本主義再生産過程は働き、そこからインフレーションは常時発現し、つまりは常在することになる。現代資本主義再生産過程は、それに特有の不換の通貨を用いることによって駆動され、特有の再生産過程を具現し営まれるが、これを通貨のがわからいえば、そのようにして現代不換通貨は現代資本主義再生産過程より引き離せないものになり、それは不可欠の要因であり、そういうものとして現代資本主義再生産過程の機構の中に組みこまれ、不可離の機能を営んでいる。現代資本主義とは、不換の資本主義経済のことに

ほかならない。不換の資本主義経済の通貨制度として、現代不換通貨は生じ、常在し、機能を続ける。そこから現代に特有な貨幣・金融現象や過程が生じる。こうして現代は不換の経済時代として特徴づけることができ、また現代の貨幣・金融は現代不換通貨を前提とし基礎とし、また手段として成り立ち生じる貨幣・金融問題や現象であると、理解してゆくことができるのである。

2　大恐慌、金兌換の停止

さきに現代を不換の経済として特色づけたが、もちろん一夜が明ければそういうことになっていたと、いったものであるはずはない。すでに経済そのものが過程である。しかも不断の歴史的形成過程以外のものではない。そういう歴史的形成過程のさなかに形成されて、事がらは出てくる。初めになんとはなく形が現われるにつれ、また形もしだいに整ってゆき、固まり、成長し、拡大してゆくようになるうちに、人々は気づき、意識に上ぼせ、思考が始まり、類型化し理念化してこれを概念にまでして取出せるようになるまでに発展するときには、そこに認識が生まれるわけであって、すなわち知識となる。もちろん、そういう歴史の発展については、時により緩急があり、遅速もある。それこそまさに、歴史の現実というものだ。産業資本主義が歴史的に過程してゆくうちに、不換の現代資本主義は芽生え、形を整え、いつとはなしに拡大し発展し、さらに定着し定住するようになって、今日の不換の資本主義体制に至ったものであると、いえよう。どの時点、どの場所から一挙にして不換の現代資本主義が生誕し、それは完成したなどとは、歴史の現実を見つめ、これをたどる立場からは軽々しくいえるものではない。形成されゆく歴史の現実の過程につき、忠実に素直に、見てゆくほかはないとしか、いいようがない。しかしそれでも、やはり物事には切っかけというものはありうる。そのときには気がつかないでも、あるいは全然別の事がらとして受けとられていても、あとから気づき、あとからしさいにたどって見るときには、そうであったかと自覚し、自得に

達することはありうる。新しい形や関係が生成を終えて、われわれの注意と関心にのぼり、容認をえるほどまでに発展してきた段階に至り、そこから時間をさかのぼり、この新しい形や関係は、いつごろ、どのようにして始まるようになったかが、問題となり、回顧されて点検され、あのとき、あの事件を切っかけにしてそれは始まり、今日の事態・過程にまで及ぶ経緯や契機が歴史的に究明されてゆくことになる。歴史の展開や定着の現実は、もとよりさまざまの契機により促進されはするが、また抑制されもし、そうしてさまざまの時期や過程を区切りながら、歴史的形成は進んでゆく。われわれとしていまの場合、現代不換の経済の切っかけとしては、当然のことながら、一九三〇年代の世界大恐慌にまで立ち帰らなければならない。それは不換の経済の時代への幕開けとしては、文字通り嵐の序奏であった。

一九三〇年代に荒れ狂った世界大恐慌の過程の中で、すべての資本主義国は通貨の金への兌換を停止せざるをえなくなった。もちろん、それと意図し、それを望んでのことではなかった。当時いずれの国々も金兌換を守るために最大の努力を払った。しかし世界にわたる恐慌の深化と拡大のまえには、すべて成功しなかった。万策尽きて兌換を停止せざるをえなくなったというのが、当時の不換化の実情である。したがって、この恐慌を乗り切り、嵐が過ぎれば、ふたたび兌換を回復する日もあろうとの期待があり、これを希望したのが、兌換を停止するにあたっての当時大方の考え方であった。わが国についてみても、昭和六年（一九三一）一二月一三日の金輸出再禁止に関する大蔵省令は、日本銀行が行なう金貨兌換を許可制にし、しかし当分のあいだはこれを大蔵大臣は許可しないという方針をとったことからでも分かるであろう。しかしそういう切なる期待や希望に反し、兌換再開の見こみは立たぬまま、世界大恐慌はいつしか第二次世界大戦へと転化されてゆく。

3　兌換制再建への努力——IMF体制

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com